



開場当時のドックヤードガーデン (写真/西脇敏夫)

「横浜都市デザイン」の50周年に寄せて

元横浜市都市デザイン室長
西脇敏夫

横浜駅からみなとみらい、関内、山手に至る港町横浜のエリアは多くの人々で賑わっています。そこには多くの新しい商業施設や文化施設とともに、歴史的な建造物が混在する街並みが形成されています。

横浜市が都市デザイン活動に取組みはじめて、今年で50年が経ちました。当時はまだ都市の基盤整備が不十分で、機能的、経済的価値観だけで施設づくりや街づくりが行われ、多くの自然や歴史的資産が消えていく時代でした。

しかし横浜市は、人間的な生活が営める快適な環境と、横浜らしい魅力を感じることを出来る街にするためには、社会的に弱い立場にあった快適性や美しさなどの質的な価値をまもりながら街づくりを進める必要があると考え、全国に先駆けて都市デザイン活動を開始しました。様々な取組みの中でも「歴史を生かしたまちづくり」は重要なテーマでした。

歴史的な資産を守る法律は文化財保護法しかなく、主に明治時代以前の建物を凍結保存することが目的でした。そのため横浜市のように震災と戦災に遭った街の歴史的建造物を守ることはできず、文化財保護条例もありませんでした。

そこで33年前、街づくりとして歴史的な景観の価値をまもるという考え方に立った「歴史を生かしたまちづくり要綱」を文

化財保護条例とともに作りました。「認定」や「登録」の制度や歴史的景観保全委員などの仕組みも作りました。「登録」制度は、その後文化財保護法にも盛り込まれました。

また当団体の前身である「横浜市歴史的資産調査会」も研究者等によって設立され、調査研究や普及啓発活動を行うことになりました。

こうして「歴史を生かしたまちづくり」が本格的に行われるようになり、多くの建造物が、関係者の努力によって保存活用されるようになったのです。

昔は市民の目には触れることのなかった「旧横浜船渠2号ドック」が、一つ一つの石に番号をふって丁寧に取り外され、高層ビルの足元に再び積み上げられて「ドックヤードガーデン」になったこと、「赤レンガ倉庫」は倉庫を包み込む大きな素屋根のユニットを移動させて壁面の補強や屋根を葺き替えたこと、「旧横浜銀行本店別館」は、みなとみらい線と都市計画道路の二つの事業にかかるため、円柱で構成された先端部を2回大きく曳家したことなどが懐かしく思い出されます。

そして、関内地区の「ホテルニューグランド」などの近代建築物や、山手地区の「エリスマン邸」などの洋館をはじめ、横浜には街の歴史を物語る建造物たちが今も息づいています。

アーバンデザイン50周年を迎えて

横浜歴史資産調査会常務理事 米山淳一

巻頭にアーバンデザイン50周年を記念して元横浜市都市デザイン室長西脇さんにご寄稿を頂いた。ここでは、西脇さんを囲んで、当公益社団法人会長宮村忠氏、副会長吉田鋼市氏、常務理事米山淳一の3人が加わり、その足跡をたどって語り合ったことをまとめてみた。



◎三代目の都市デザイン室長と宮村会長の出会い

アーバンデザインをつかさどる横浜市都市デザイン室は、事業の根幹となる「歴史を生かしたまちづくり」を推進する中枢。事業を進める三本の柱は、歴史を生かしたまちづくり要綱、歴史的景観保全全員協議会、そして横浜市歴史資産調査会（以下、調査会）である。要綱は歴史的建造物を都市景観として保全する武器であり、全員委員会は市民や学者・研究者で構成され歴史的建造物資産の価値を見出す役割。そして調査会は、歴史的資産の登録、保存誓約、認定等の為の調査を行う専門機関としての位置づけだ。これらのメンバー構成は当時、都市デザイン室歴史担当だった北澤猛氏が行った。特に北澤氏は、歴史資産調査会の名にこだわった。それは、専門機関として威厳を保つ意味合いを強調したかったからである。

その調査会が外部的な位置づけにも関わらず、当初の事務局は都市デザイン室内にあった。色々な声が聞こえ、事務局を財団法人はまぎん産業文化振興財団に委託する段になり、初代会長西和夫氏（神奈川大学教授・故人）が市の中の調査会であるべきと反論し、会長を辞退。そこで白羽の矢が立ったのが宮村忠氏だった。以後、都市デザイン室と調査会が両輪となり「歴史を生かしたまちづくり」を推進する形ができあがった。そして平成25年（2013）から調査会は内閣府公認の公益社団法人横浜歴史資産調査会として独立し、体制は一層強化されている。

◎歴史的建造物を残すのは至難の業

市内の都市景観を彩る赤レンガ倉庫を代表とする様々な歴史的建造物は、当時のデザイン室の活躍無くしては残っていない。その



旧横浜銀行本店別館の曳家風景。1995年



足跡をたどる会合。右から西脇さん、宮村会長、吉田副会長

スローガンは、「何をするのかではなく、何をやったのかである」と西脇さんは力説する。攻め込んで行く、不可能を可能にするがモットーであった。例えば、第一銀行の曳家事業でのこと。この成功を祝した打ち上げで、意外にも調査会の先生方からは難問ばかりで大変だった、一方、業者さんからは予算をオーバーして困ったと苦情ばかりが飛んできた。これを受け、会の最後の挨拶で西脇さんは「都市デザイン室は、困難でも将来的に評価されることを考えて景観保全の仕事をしている」と答えた。会場が大きな歓声と拍手に包まれたと覚えている。

これを聞いて「苦い経験がある」と吉田副会長。ライジングサン石油横浜本社ビル（レイモンド設計）の保存問題でのこと。とにかく大事な建物だから保存してほしいと支社長に伝えたら「このビルを一日残すことで当社はどれほど金銭的損害を生じているか君は分かるか？」と言り返された。会社の事情も分からずに、一方的に攻め立てることは不味いと気がついた瞬間だった。結局、入り口のドアをデザイン室がもらい受け、根岸競馬場に一時保管。新たなマンション建設時にこれを玄関口に再利用した。幸い、マンションの住人はこのドアを誇りに感じており、2019年に管理組合は解説板を設置している。この事業は、当公益社団が受託した。

「関東大震災復興事業の橋梁や護岸を見て回ったが、横浜市の歴史資産の厚みを実感した」と宮村会長。思い出深いのは、大岡川河口の生糸検査場に通じる3連トラス橋の移設。踏ん張って二つを残したことだという。北海道炭礦夕張川から転用の橋は現汽車道へ、もう一つは横浜市が難色を示したので国交省に話して江戸川の源に位置する中の島公園（茨城県）に移設し人道橋にした。

◎とにかく残すことと知ってもらうこと

こうして残した歴史的資産を広く市民に伝える手立てとして、横浜新聞の発行や講演会、見学会等を開催するなどの普及啓発事業を行ってきた。携わったのは米山と内山哲久（当公益社団監事）だ。全国の先進地からのゲストや、日本ナショナルトラスト（以下JNT）で招いた英国シビクトラスト理事、英国アイアンブリッジ峡谷博物館長、英国王立都市計画協会会長、米国フルブライト研究員らを横浜に招いて、講演会等を開催した。世界に目を向けた横浜の取り組みも見てもらい、ご助言を得る絶好の機会になった。

昭和63年（1988）に始まった歴史を生かしたまちづくりは、アーバンデザインに裏打ちされ今も輝きを失わない。情熱、速攻、粘り腰、培った術は永遠の財産だ。

西教寺本堂の魅力(南区三春台)

横浜歴史資産調査会理事・横浜国立大学都市科学部教授
大野 敏

南区三春台に所在する西教寺は、浅草本願寺別院(浄土真宗大谷派)横浜出張所で布教活動していた伊藤大忍師(1858-1938)が、埼玉県に所在した西教寺の寺跡を継いで明治36年に現在地へ寺を移したことに始まる。寺地は久保山墓地周辺に明治以降形成された寺院群の中心部の一画を占める。横浜における西教寺再興時の本堂・庫裏は既存の堂宇を利用したと伝えるが、大正9年(1920)に本堂を建替えた。

しかしこの本堂は関東大震災(1923年9月)により倒壊した。そして再建されたのが現本堂で、棟札により昭和5年5月起工、同6年3月17日上棟式、同年5月竣工、設計は横山虎雄、施工は大林組と判明する。当時の住職は第2世伊藤達師(1889-1952)であった。設計者横山虎雄は旧姓洪澤で、洪澤栄一は叔父にあたる。大正2年に東京帝国大学工科大学卒業後、大正6年1月まで清水組設計部(現清水建設)に在職した。西教寺本堂以外では洪澤栄一の関係で大正4年、郷里(現埼玉県深谷市血洗島)に諏訪神社拝殿を設計した。

本堂は寺地中央に南面する。躯体は要所に鉄骨を併用した鉄筋コンクリート造で、小屋組鉄骨造と屋根面鉄筋コンクリート造により入母屋造・妻入・棧瓦葺屋根を形成する(写真①)。一方、平面は伝統的な浄土真宗本堂形式を示す。

すなわち建築概要は、鉄筋コンクリート造(一部鉄骨造および鉄骨鉄筋コンクリート造)・桁行5間(約12.7m)・梁行5間(約10.9m)・一重・入母屋造・妻入・棧瓦葺きの主体部正面に間口約5.6m・奥行約3mの向拝を設け、西側面後端と背面全面に巾約1.8mの下屋を設け、向拝・下屋とも主体部と一連の棧瓦葺きとし、東北隅に一部地下室を設ける。

平面は、前3間分を外陣、後2間分は中央を内陣、両脇を余間とし、以上を主体部としてその正面に向拝を設け、西側面後部と背面にL字型に廊下を設ける。

外陣は広い単一空間とするが、天井梁配置に注目すると左右3区・前後3区の9分割し、区画毎に板金製の格天井を設ける。このうち内陣寄りの3区画に対応する床面は畳敷として、他の絨毯敷きと異なる形式とし、矢来間という浄土真宗特有の外陣区画を表現する。

内陣と東西余間は上段構成で畳敷きとし、外陣境の建具に巻障子を採用し、内法上に極彩色の彫刻欄間を備える(写真②)。内陣中央後方の仏後壁前方に豪華な須弥壇と宮殿を備え、本尊をまつ。さらに内陣背面の両脇間背面と東西余間背面は仏壇を設ける。内陣と余間境は内法下を開放する。天井は、内陣・東西余間とも



写真①



写真②

桁行中央に天井梁を配して板金製の格天井を設ける。

なお、向拝は広い間口(約5.4m)を有し、側面は壁とガラス窓で間仕切る。すなわち堂内後方の廊下以外は建物周囲に縁は設けず、正面向拝をテラス状に構え正面出入口へ誘導する。

廊下は、内陣背面中央間(「後門(ごうもん)」)から東余間や庫裏への連絡口として重要で、背面廊下東端に地下室への昇降口を設ける。

建具は、堂内の間仕切として外陣と内陣・余間境は脇障子、西余間と廊下境は腰高障子と伝統的な木製建具を採用するが、外周部の建具は防火に配慮した鉄扉または耐火ガラスを用いた鉄製建具を採用する。ガラス建具は冗くずしモチーフと思われる棧組を表現する点特徴的である。

以上、平面構成における西教寺本堂の特徴は、外陣を広く構え矢来間も備える点、内陣と余間を上段とする点、内外陣境は巻障子と彫刻欄間を備える点、において近世以来の浄土真宗寺院の形式を良く示す。

本堂の建築の最大の特徴は、鉄筋コンクリート造を主体としつつ内陣丸柱や格天井および軒回りにおいて鉄筋コンクリート造特有の量感を抑制している点であろう。その理由は、躯体・屋根の構造を分け、躯体は中枢構造部を鉄骨鉄筋コンクリートで作成し、天井と軒を板金製とする点にある。すなわち、鉄骨鉄筋コンクリート造の太い柱6本は大空間を持つ外陣と内陣後方に配置するのであまり気にならない。そして構造的負担から解放された内陣柱の多くは木造のプロポーションに倣った表現が可能となり、格天井と軒回りも木造的な軽快さを表現しながら耐火性と軽量化を果たしている。ちなみに鉄筋コンクリート層の屋根スラブは、鉄骨トラス上に木造母屋桁を架して構築しており(写真③)、耐火性には課題を有する。しかし躯体が別構造なので、本堂内部は耐火性が保たれている。この点は伝統的な木造土蔵の本体構造と置屋根(火災時の焼損・復旧を前提)との関係が想起されて興味深い。このように、伝統的な仏堂建築を鉄・ガラス・コンクリートの近代的素材を用いて巧みに表現した点において、注目すべき近代建築といえる。



写真③

2022年10月14日 新橋-横浜鉄道開業150周年

連載 第3回
文化庁文化財調査官 北河大次郎

150周年にあたって

鉄道の文化財に注目すると、100周年から150周年の間に大きな進展がありました。100周年の頃に初めて旧新橋停車場跡が史跡指定され、その後昭和から平成にかけて門司港駅、東京駅、梅小路機関車庫、末広橋梁が次々と重要文化財に指定されました。また旧碓氷峠鉄道施設・旧手宮鉄道施設・旧筑後川橋梁・旧大社駅等の廃線施設、一号御料車・ED40形式10号電気機関車等の車両、鉄道古文書等の史料も重文指定されると共に、平成8年以降は若桜鉄道、わたらせ渓谷鉄道、くま川鉄道など数多くの現役の地方鉄道が登録文化財になっています。結果として、北から南まで全国各地の貴重な鉄道施設が文化財に位置づけられ、それらを巡れば鉄道150年の歴史が理解できる状況に近づいたかと思えます。

今150周年という新たな節目を迎え、旧新橋停車場跡と同じく鉄道の原点である高輪築堤の一部が史跡指定される一方で、戦後鉄道施設の第一号として第一大戸川橋梁が重文指定されるなど、新たな動きも出てきています。これからも、文化財指定・登録を通して豊かな鉄道文化の再発見を促し、鉄道がより多くの人々に愛される存在になれば良いと思います。



パリメトロ100周年のロゴ看板

150周年記念事業について

鉄道の記念事業といえば、パリのメトロの100周年事業が思い出されます。メトロが1900年という世紀の端境期に開通したことから、100周年は20世紀を21世紀に繋ぐというコンセプトで、歴史と未来の懸け橋となるような展示やリニューアルが行われました。それによって、普段何気なく利用しているメトロの歴史性や芸術性がクローズアップされ、日々の乗車もまるで博物館の中を移動しているような気分になってくれました。日本の鉄道もメトロと同様、人々にとって当たり前の風景ですが、記念事業によって、そのあたりまえの世界の見え方が変わるような仕掛けがあると面白いと思います。

貴会が構想している「みんなの鉄道150周年」のロゴ製作も良い案だと思います。せっくなので、貴会がこれまで調査してきた歴史資産を選定して(150か所?)、ロゴと解説を書いたプレートを市内に張り出してもらい、鉄道の魅力を再発見するきっかけとするのはいかがでしょうか。

受付中!

■歴史を生かしたまちづくり相談室

老朽化、修理費、固定資産税、相続税など歴史的建造物に係るご相談を付けています。ご相談は、下記ヨコハマヘリテイジ事務局まで。
TEL・FAX 045-651-1730 E-MAIL yh-info@yokohama-heritage.or.jp

■歴史を生かしたまちづくりファンド

歴史的資産の保存活動推進のためにファンドを創設し、みなさまに寄付をお願いしています。寄付は、税法上の優遇措置が受けられます。当公益社団への寄付は、特定公益増進法人として税法上の優遇措置が適用されます。詳しくは事務局でご説明させていただきます。

■『ヨコハマヘリテイジスタイル 2021年秋号』

■発行/2021年11月10日 公益社団法人横浜歴史資産調査会

■事務局/〒231-0012 横浜市中区相生町3-61 泰生ビル405

TEL・FAX/045-651-1730 E-MAIL/yh-info@yokohama-heritage.or.jp

ホームページ <http://www.yokohama-heritage.or.jp>

旧モーガン邸再建のため ご寄付のお願い

旧モーガン邸(藤沢市)は、横浜山手等で多くの作品を残した横浜ゆかりの建築家J.H.モーガンの自邸です。緑に包まれた約2000坪の敷地に優美な西洋館が佇んでいましたが、2006年、2007年の二度の不審火により焼損しました。

公益社団法人横浜歴史資産調査会(以下ヨコハマヘリテイジ)は、日本ナショナルトラストが所有していた焼損した建物・土地等を引き継ぎ、新たに再建に向けた活動を開始しました。再建後には、地域の文化交流拠点(ヘリテイジセンター)として皆さんが集える場所として整備して参ります。つきましては、再建のための寄付金を広く募っております。皆様のご支援をこころよりお待ちいたしております。よろしくお願ひ申し上げます。

個人=5,000円(一口)・団体・企業等=100,000円(一口)
一口から何口でもありたくお受けいたします。ご寄付頂いたみなさまのお名前は、再建した建物室内に掲示させていただきます。

*当公益社団への寄付は、税法上の優遇措置が適用され、所得税(個人の場合)、法人税(法人の場合)の控除が受けられます。詳しくは事務局からご案内します。

振込先: ゆうちょ銀行

口座番号: 00270-4-124271

加入者名: 公益社団法人 横浜歴史資産調査会

※恐縮ですが、旧モーガン邸と明記してください

ご寄付をくださったみなさま。ありがとうございました。

協同組合伝統技法研究会	100,000
榎 重善	10,000
木阪尚志	10,000
金木伸浩	10,000
鶴田賀陽子	7,000
上村耕平	5,000
石崎正彦	5,000
米村洋一	5,000
徳重淳子	3,000
渡利典子	3,000
梁山直子	3,000

(2022年10月末現在)



訃報

中村實監事のご逝去

(元公益財団法人はまぎん産業文化振興財団事務局長)
令和3年(2021)7月14日、86歳。昭和63年(1988)の調査会発足当時から幅広い見識で、委員としてご活躍。特に横浜学には造詣が深く、様々な生活文化が息づく横浜を「横浜、よこはま、ヨコハマ、yokohama」と文字でイメージ表現され魅力を広めた。関東学院大学非常勤講師をはじめ東北文化学園大学学部長を歴任。ご冥福をお祈りいたします。